

# 松島海軍中佐の 赤穂義士史料発見

全義連事務局長 中島 康夫



発行人

〒104-0052

東京都中央区月島3-15-9

中島康夫

TEL 03-3534-0666

編集者 中島康夫

TEL 090-8005-9762



松島海軍中佐に贈呈された「赤穂義士史料」3巻

平成二十二年六月七日、突然、中央義士会役員であった松島慶三海軍中佐のお孫さんと名乗る松島広明氏より電話をいただき、「我が家に祖父の赤穂義士史料三巻渡辺世祐著があるので譲りたい」との申し出があった。

昭和六年に、我が会より刊行されたこのシリーズは、現在、神田の古書店街の相場では、三万五千円が良いところではないかと思われるが、一時は十四万八千円まで高騰した時期があった。

それが、平成十一年雄山閣より三巻七万円で復刻されたので、古書の方は、三万円台にまで下がった経緯がある。

かと思いきや、先日神田の古書店で手に入れた三巻の復刻版の定価が四万五千円ということであつた。あまりに売れないので下げたという想像しか思いつかない。

そういえば、平成十一年復刻版出版の際、雄山閣の担当者が私の許を訪ね、復刻出版刊行に改めて中央義士会の名前を使わせて欲しい旨の申し出をされたのであるが、その際、担当者が、

「刊行に当たり、学習院大学名誉教授の大石慎三郎氏に挨拶文を頼みたいと思つているので了承してほしい」との申し出があつた。

私は即座に、

あんなバカチョン先生の挨拶は不要の旨伝えた。あんな下劣な男の名前を載せるのであれば、本の価値が下がるので中央義士会の名称は断る旨伝えた。その結果、復刻版には、中央義士会編という表示はされないという結果になつた。

歴史学者という方々は、一度名声を得てしまうと、周辺の事も考えずに「自由勝手に放言する」悪い癖がある。

現在も、どこぞの博物館館長なる御方は、影響も考えず、思い付きの放言を繰り返している。それを、何も知らない一般の勉強者がありがたやとお金を払って傍聴している。まるで、どこぞのヘンチキリン宗教と同じである。それに輪を掛けて東京都は税金で高給を払っているこの現状。東京都も見かけ倒しでも、その先生方は仕分けをした方がよいのではないか。

それにしても慎三郎先生は晩年、何の理由でもってああも「元禄事件」を攻撃してきたのか、いまだに謎である。

松島海軍中佐の話に戻す。現在、御孫と名乗る方は、一回目の電話では譲る申し出のみであったが、それから、二月後であったか、宅配便で本が届いた。

私はどうせ分かりきっているあの三冊と思い、一日開封せず置いたままとしてい

た。二日目の手のすいた時に開けてびっくりした。

それは、私が現在まで目にした事もない玉手箱であったのである。

桐の箱に三巻が入っており、更に、表紙を開けると、「贈呈 昭和十二年 財団法人中央義士会 素行会 松島海軍中佐殿」

と記してあった。これは、恐らく、役員一人一人に書いたものと推察される。三巻は使用されていない

ようで、当初のままの状態であった。七十三年前の本が今開かれたのだ。

昭和十二年といえば、上海事変などが起こった時代ぐ

らいしか知らない私であるが、この時期、何のために、桐の箱へ入れたかさえ記録がなく、調べるすべもない。

唯、中央義士会に一つの玉手箱が戻って来たことは確かである。

# 贈呈

昭和十二年十月

財団法人 中央義士會  
素行會

松島海軍中佐殿

## 赤穂市教育長来駕

全義連事務局長  
中島康夫

お会いしたのは平成二年頃ではなかったかと思われる。それから、上京される度に案内、歓談、打ち合わせを繰り返していた。

また、小生が赤穂へ行った時は、かならず自家用車で相生駅まで迎えに来ていただいたことを思い出す。

次ぎの、宮本教育長とも平成十四年義士討入り三百年祭の際、北海道で四日間一緒させていただいた思い出がある。

その間も、平井教育長とお付き合いは続き、最後にお会いしたのが、大石神社宮司飯尾精先生の葬儀であった。

この度も、室井教育長とお近づきになり泉岳寺へ参拝したことがないと聞き、早速お二人を案内した。境内を一通り説明した後、お二人は、浅野内匠頭や赤穂義士の墓に合掌していた。

その後は、再度新橋まで戻りお別れをした次第である。

元赤穂市教育長平井伸次様の御逝去に際し心より哀悼の意を表します

平成二十二年十一月二十六日、赤穂市教育長室井久和様と、同じく宮崎生涯学習課長のお二人が上京、小生と新橋で待ち合わせ、席を設けて歓談した。

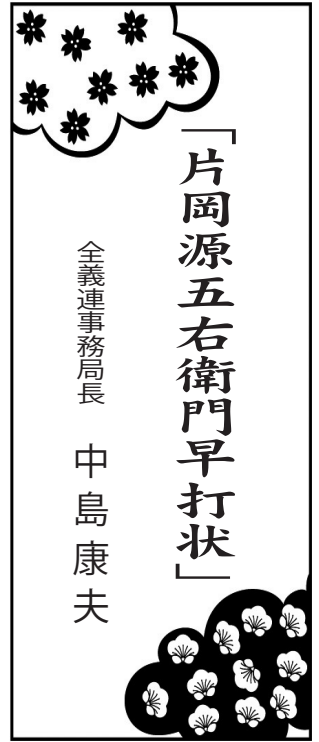
その際、今年の「最後の忠臣蔵」の映画劇場用宣伝を担当している株式会社ワーナーマイカル社の方も同席、十二月十八日封切られる映画の進行状況について説明された。

また、劇場用のパネル等についても、赤穂市の協力を得たいとのことで話し合われた。

その後、近くの切腹最中の新正堂まで足を伸ばし表敬訪問の形をとり、少々歓談。

これに先立ち、元赤穂市教育長の平井伸次様が今年十月二十三日ご逝去されたことは実に残念に思う次第である。

今更ながら、平井教育長とのお付き合いは長く、最初に



# 「片岡源五右衛門早打状」

全義連事務局長 中島康夫

世にいう松之廊下事件の現状を、浅野内匠頭用人片岡源五右衛門から国許の家老上席大石内蔵助へ送った「注進状」です。

これは、「元禄事件関係の諸書によく掲載されている「赤穂花岳寺所蔵」とされる資料です。

しかし、この書状は江戸時代よりよく写され諸氏の方々が所持されて、いろいろな展示会に「真書」として出品されている経緯がございます。

先年、台東区の「習字連合会」所蔵として堂々と展示されていたこともございました。

また、よくテレビドラマなどにも採用され、名優たちが読み上げているシーンを目にします。

この度も品位あるはずの「江戸東京博物館」が本物として何ヶ月もの期間展示されておりました。

そこで、解読分を提示し、少し考えてみたいと思います。

下記の片岡状とされる注進状を考えて参りますと、まず、

(一)「松之廊下に於て吉良上野介理不尽の過言を以て恥辱を与えられこれにより君刃傷に及ばれ候」

## 片岡源五右衛門早打状 (伝)

口上書を以て申上げ候事

一御勅使柳原中納言様  
高野中納言様 院使  
清閑寺中納言様 御道  
中御機嫌克く当月十一日御到着 十二日御登城 十三日御饗応御能相済み 翌十四日於御白書院御勅答の式に相成り候て 御執事 御役人 親族残らず登城の折柄

ず(二) 双方御存命にて上野殿大友近江守殿へ御預け御介抱養生仰

付君即時灼命なく田村右京大夫殿御預け伝奏 饗司は即刻戸田能登守へ仰付けられ有増右の通りに候 何れ茂御家御大切の時節候故御注進の為早水籐左衛門萱野三平兩人馳せ登らせ申候 此の日取り急ぎ書中能はず一々兩人委曲言上仕る可く候 尚追々御意を得奉るべく候 恐惶謹言

三月十四日(三) 已

これにより君刃傷に及ばれ候 然る処同席梶川殿押し隔てられ多勢を以て白刃を奪い取り吉良殿を打留め申さ

の下一刻 片岡源五右衛門高房 大石内蔵介殿

とあります。現在までよく「刃傷の原因が分からない」と主張される諸氏の方々は、この文面をどう解釈されるでしょうか。

筆者は「刃傷の原因」は(一)の文面で充分であると考えます。しかし、上野介の過言は「何」と疑問を求められるのであれば「赤穂義人録」の松之廊下の場面を読まれることをお勧めします。

更に更に、近年この「赤穂義人録」の史料的价值を疑問視された先生がおられました。それは史家としてどうでしょうか。

「赤穂義人録」は元々は「聞書」ですので、全編に正確性を求めるのはどうかと思えます。

義人録は、義士一人一人の情報も入っており、それらの箇所が何度も校正されており、正確を期そうとする努力が文面に表



れております。特に、松之廊下の喧嘩の場面は、レポーターの杉本義鄰が江戸城内の旗本より正確に聞き取っております。それは、現場に居なければ分かり得ない細かい箇所が示されているからです。従って、現場に居て

内匠頭を押さえた梶川与惣兵衛が書いた「梶川氏日記」とも合致する部分があります。

その「赤穂義人録」に、「鄙野の子、しばしば礼に曠し。また司寶の選を辱しめざらんや」とあります。それは、現代語に直しますと次のような意味でございます。

「田舎者（内匠頭のこと）は、終始、礼節を欠き、このたびも御勅使方に失礼をしてばかり」

この「田舎者」に内匠頭は我慢の緒が切れたのです。

筆者も四十七年間、全てを犠牲にして研究してきた結果、また、他の一級史料と突き合わせて出した結論は、正しく、この注進状に示してある（一）の部分、事件としては真実と思われまます。

次に（二）の、「双方御存命にて上野殿大友近江守殿へ御預け御介抱養生仰付」

のことですが、この「双方存命」は誰が思っても、まぎれない事実です。

しかし、遠く離れた赤穂城では、江戸から赤穂へ駆けつけた安兵衛や片岡も含めて、三月二十七日くらいまで、吉良上野介の確かな生死不明だったのです。

松之廊下事件の起きた三月十四日の「注進状」執筆時に、片岡が吉良の生死を決められるだけの

情報は持ち合わせていないと見るべきでしょう。

何よりも何よりも、「注進状」が書かれた巳の下一刻（現在の午前十一時）は、内匠頭が吉良に切り付けた時間ではありませんか。

あの広い城中で事件が起こり、それが城外へ伝わるには、少なくとも三十分くらいは掛かるでしょう。それから、片岡が書面を書くにも十五分

くらいは掛かるでしょう。この注進状によると事件が起こると同時に、片岡は書状を書き終えております。現代の新聞記者でも、そんなことは出来な

いでしょう。更に更に、この「注進状」は花押も筆跡も、現在残っている片岡の花押や筆跡とは、明らかに違います。その上、大石内蔵助であるべき宛名を、大石

内蔵介と書状は書き違えております。そして、この元禄事件研究において、専門書という特別な書物もあります。一冊としてこの注進状を本物扱いして、史料集に載せている本はありません。

何も確認しないで持ち主が差し出したまま展示をされる江戸博の学芸員の方々。少し不勉強すぎやしませんか。



片岡源五衛門の著名と花押

## 大石内蔵助剣術の師

## 奥村権左衛門

宇都宮 七五

奥村権左衛門と申しますと、幼少の時より武芸を好み、その容貌魁偉、蓬頭突髪、幼くして剣をたのしむというのですから、その体格も大きく立派であり、頭も乱髪で鬚毛もふさふさとしており、恰も絵に描いた鍾馗さんのような、すこぶる勇猛にして観るから絶世の勇士といった風容の人物であったかのように思われるのです。しかして長ずるに及び、落合、阪口、吉川、鈴木等の人々について剣道を励み、力を臆すること多年その技すこぶる上達したというのです。

ある説には、権左衛門はその技の上達とともに、赤穂浅野家に仕えてその師範役となったという説もあり、また、山鹿素行が、赤穂に謫居の時は、その門に入って学を受けたという説もあるのですが、年齢の関係上、信ずるに足らぬと思います。

このようにして、とにかく、権左衛門はその剣道に上達したのでありますから、傍ら近傍の郡国を客遊していたのです。それで士人争つて之を師とし、自らもまた大天狗になりまして、天下我に敵するものなしと、大いに威張っていたのです。

しかるに、たまたま、川崎氏の弟子で、田神無外と申す剣客が、江戸より備中へ参りましたので、権左衛門はこの事を聞くや、作州よりはせ参じまして、これを訪ね行き、試合を申し込んだのです。しかるにこの日は雨はなほだしく、依つて雨具して闘つたというのであります。しかも田神無外の

杖の鋭さ、一上一下風を起し、その技敵すべくもなかつたのです。そこで権左衛門は、杖を投げて三拜九拜直ちにその場において門人となつたのです。この点、流石は無我の無我たる所以にして、武人の多くが我執に僻して、かかる場合は逃げるか、鬪討ちか大抵相場はきまっています。したがって容易に他に従うことを欲せざるに反し、権左衛門がその負け惜しみもなく、人の長をとること流れに従うがごとくであつたということは、誠に偉いところであると思うのです。

それはそのはずでして、ご存じのごとく東軍流は、常州筑波山の東軍寺の僧によつて編み出されて、始められた剣法でして、その始祖は東軍坊であり、それから川崎鎗之助、それから五代の孫川崎二郎太夫に伝わり、それから高木甚左衛門に伝わつた剣法ですから、この田神無外は、全く東軍流の直系たる川崎氏の高弟であつたものと思われまふ。しかも田神無外は、関より以西足跡至らざるところなきの剣豪であつたのです。

左様にして、権左衛門は、田神無外を師と致しましてこれに従ひ学ぶこと数年、その技域に進んだのです。よつて田神無外は、それ去るに臨んで、書五編を出して、これを権左衛門に与えて曰く、「異日これを讀まば、必ず得るところがある」といつてこれを授けたのです。すなわちこの五編の書こそは、東軍流の免許皆伝書であつたのです。

しかして、奥村権左衛門に剣を学びたるものは、森美作守長成の家老、関式部衆利（この人は森長継の養子となさんとせしか、失心した人であります）その外、赤穂浅野家の大石内蔵助良雄、大石瀬左衛門信清、潮田又之丞高教、近松勘六行重等があるのですが、その他諸国の豪士五百余人を数うべくであつたのです。また権左衛門は、あえて槍術を佐分利士成に、脱刃を仲野権平に学び、各々その秘奥をつくした人でありました。

かくて、権左衛門は元禄十三年、年四十二歳の時、三十俵四人扶持を以て、高松侯松平頼常（節公）に召し抱えられ、総領組となり、城側の堀端（あるいは八幡馬場ともいう）に屋敷を賜り、侯及び家中の師範役となり、幾多の門人を指導したのです。唯今申し述べました松平頼常侯は、水戸光圀卿の長子であります。

このようにして、権左衛門は、高松藩の剣法師範たること年ありましたが、享保八年六十五歳の時に、不行跡の廉を以て、その職を免ぜられまして、家居していたのです。

先是、権左衛門は楠氏をめぐつて、重清、重有の二人の子を設け、享保十九年五月十七日、七十六歳を以て歿したのです。しかしてその碑銘は、その遺言によつて、武道の門人たる菊池武賢黄山が、その墓碑銘を撰し、佐々木文山の弟子にして、藩主頼豊の右筆の脇養親が篆書しているのです。墓は高松郊外の西方寺にありまして、武士道の精華として、今に至るまで欽仰せられ墓前には香華が絶えぬという事です。

さらに、赤穂開城騒ぎの時に、高松藩よりの密偵として、赤穂に差遣され、城池要害の場所、籠城の人員、重なる人々の姓名等の探索についた竹井金左衛門定宣もまた、奥村権左衛門の門人でした、この時二十二歳の若者でした。この時に竹井と吉田忠左

衛門との佳話もあるのですが、今日はこれを略します。また竹井が赤穂に差遣された時においてその竹井母子の佳話等もありますが、これは他の機会に譲ることといたします。

さて、奥村権左衛門は、元禄十三年、年四十二歳で高松侯松平頼常に聘せられる前に、はやく高松に道場を設けて子弟を教養し、かつ軍学教書にも精通するところがあって、その門人の養成には、深くもその意を用いるところがあつたのです。大石良雄は、権左衛門がいまだ高松に来らざる以前、二十四、五歳の頃より三十歳前後の時に、赤穂において奥村権左衛門に従い、剣道の指南を受けたものであらうと思われるのです。それは大石良雄が元禄四年五月十三日に、権左衛門に送つた手紙がありま

す。  
この書面は、やや疑わしい点もあるのですが、一寸その要領を読んで見ます。

「一筆啓上仕候、先生愈々御機嫌能く、暑寒の御厩もなく、日々御精勤の由大慶に奉存候、偕て先達御懇願申上候如く、豫て御教授蒙り候、東軍流剣術、再應御教導願上度存念に付、殿様へ御暇乞を願候處、御免を蒙り候故、先生の御許如何に候哉、御差問も無之候得者、御地へ推参可仕候間、何卒御許容被下度偏に願上候 謹言  
元禄四年五月十三日 大石内蔵助 花押」

奥村権左衛門殿

「  
とにかく、右により、奥村権左衛門は、大石良雄が赤穂の家老ですから、慎重に慎重を重ねまして、高松侯の家老松平外記に上願の上、その許可を得た  
という事です。」

かくて、大石良雄は、元禄四年秋八月の末、高

松の東浜港に着船し、奥村権左衛門を堀端の屋敷に訪ね、再び奥村権左衛門の門人となり、高松五番丁浄願寺中称名院の座敷を借りてここに寓居を構え、奥村の道場に通り技能ますます上達していったのです。当時差し出した起請文は、すでに申し述べました如くに、高松浜ノ丁見性寺に珍藏されてあるのですが、これは奥村権左衛門も、大石良雄も同じく、その宗旨が禅宗であるということよりして、その菩提を弔い、その冥福を祈るべく同寺に納めたものという説と、また権左衛門妻女の里方たる楠太郎左衛門の家々に伝わつたものを、安永八年の五月、義士切腹後七十七年目に、那須小十郎という人が納めたという説とがあるのですが、とにかく、今日まで同寺に宝蔵せられているのです。

しかして、良雄は右起請文を権左衛門に納めて、五日目、元禄五年六月二十五日、その寓居称名院を出立して、高松東浜港を船出して、赤穂に向いました。

以上は、奥村権左衛門と大石良雄との関係ですが、高松にはご存じの如く、大石の一族たる大石良次弥兵衛、大石良治平内父子が、高松藩において、知行三百石の身分であつたことでもあり、あるいは良雄の推挙によつて、弥兵衛、平内父子を訪ねて高松に赴き、その手づるにより、ついにその地に道場を構えて後、高松藩に仕えたものではなからうかとも思われるのです。

なお、権左衛門と良雄との、交誼関係を知るに足るべき、元禄八年五月二十一日付の書翰が伝えられているのです。元禄八年といえは、すなわち良雄が松山城勤番の時でした。同地に滞在中、権左衛門よりの書状に対する返書として差し出した書面であり、かつまたその状況を知り得るに足るものがあります。簡単ですから、一寸読んで見ましょう。この書翰は、もと佛生山出作村河地某の所蔵です。

「尚々同名弥兵衛父子無異儀罷在候由、被仰聞令大慶候、且又佐藤伊右衛門も今程在宿申候事候、赤穂へも御越候はば、可得御意と存事にて候、以上。去る九日の御状令拜見候、彌御無事の旨珍重存候、如仰其後者、以書状茂不得御意御遠罷過候、然者源英様 去月十二日御遠行被遊候旨驚入在候、因茲讚岐守様同廿九日江戸御発駕被遊候由、夫故御家中穩便の體にて、諸藝遠慮被致候に付、貴様にも御手透御座候故、備前へも近々御越可被成旨御紙面令承知候、近に候間可成事に候はば得御意度義不任心底残念に存候、緩々御逗留の御事に候哉、承度存候、爰元無別條拙者無異儀相勤候、當地御城主も先頃被仰付之旨、追付引渡相済可罷歸と大慶存候、入御念預示忝存候、猶期後昔之時候、恐惶謹言。

五月廿一日 大石内蔵助 (花押)

奥村権左衛門様 御 報

右の書面中に源英様とあるのは、讃岐高松の藩祖で松平頼重であり、後年剃髪して、雲龍軒源英と称え、元禄八年四月十二日逝去、享年四十四歳であつたのです。

すでに述べました如く、奥村権左衛門と大石良雄とは、その年齢は同一であり、しかして、奥村権左衛門がかつて高松に仕える以前において、大石良雄の師友として剣法を授けられた関係等を想う時、奥村権左衛門が、その起請文を見性寺に納付し、その菩提を弔い、その冥福を祈つたという、その情誼は、決して尋常一様の間柄ではないことを知り得ると共に、また、大石良雄が忠誠を欽慕した至情をも知り得ることであらうと思ひます。

(以上は、昭和十年期に執筆された文章ですので、一部読みやすく語尾などを修正しました)